大分合同新聞 2024年8月26(月) 朝刊 9面

母国スリランカに中古用品寄贈

野球で架け橋 15年

別府市のアマ審判員・ウィジャヤナーヤカさん

「犠牲バントの精神」これからも

【別府】母国スリランカで野球を普及させるため、日本で集めた中古用品を無償で贈るアマチュア審判員スジーワ・ウィジャヤナーヤカさん(41)＝別府市石垣東、会社員＝の活動が、今年で15周年を迎えた。取り組みは日本政府も動かし、現地初となる球場の建設も実現した。犠牲バントなどの精神が「人をつくる」との信念を胸に、野球を通じて橋渡し役を続けていくつもりだ。

在スリランカ日本大使館によると、同国はクリケットが盛んで、野球はマイナー競技。「正確な統計はないが、競技人口は1万人程度」と説明する。

ウィジャヤナーヤカさんはガンパハという地域で育った。クリケットをしていたが、高校に野球部があり、物珍しさから挑戦した。「人が左に行けば自分は右に行くタイプ」と笑顔で振り返る。左投げの投手として国の代表選手にもなり、野球愛を高めていった。

今月、スリランカであった野球用品の贈呈式に出席するスジーワ・ウィジャヤナーヤカさん（左から２人目）

国際協力機構（JICA）のボランティアで訪れた指導者に教わった縁で日本に興味を持ち、2006年に別府市の立命館アジア太平洋大に留学。日本の大学野球のレベルには付いていけず、審判員の道へ進んだ。日本で就職後も県軟式野球連盟の主催大会などで活躍してきた。

中古用品を初めて贈ったのは09年。右手用グラブがなくて左手用を使ったり、ボールが足りずに大人数でキャッチボールしたりした経験が原点だ。日本で不用品の提供を募り、随時、現地に送ってきた。総数は「数え切れない」。

12年にはウィジャヤナーヤカさんが働きかけ、日本外務省の政府開発援助（ODA）で現地に「日本スリランカ フレンドシップ野球場」が建った。JICAを通じ、日本の民間からの寄付金も使われた。

「スリランカは今も貧しく、支援の継続が必要」とウィジャヤナーヤカさん。自分がアウトになって仲間を進塁させるバントやプレー中のあいさつなど野球の精神性を広め、故郷の発展につなげたいと願う。

今月9日はバット241本、ボール2400球を現地の高校生、大学生らに寄贈した。自身が野球に出合って25周年の節目にも当たり、一時帰国して直接渡した。

ウィジャヤナーヤカさんは「時間やポケットマネーを使って続けてきたのは自分なりの犠牲バント。日本の皆さんが支えてくれたことに感謝している。これからも一緒に頑張りたい」と話している。（中谷悠人）

今月はバット241本、ボール2400球を寄贈

©大分合同新聞社　教育目的以外の無断転載・複製および頒布は禁止します。

大分合同新聞
ワークシート

年　　組　　氏名

大分合同新聞 2024年8月26(月) 朝刊 9面

〔問①〕スリランカでは野球はマイナーです。盛んなスポーツは？

クリケット

〔問②〕ウィジャヤナーヤカさんが広めたい野球の精神性の具体的な行動は、どのようなものですか。

「自分がアウトになって仲間を進塁させるバント」「プレー中のあいさつ」

〔問③〕今も貧しいとされるスリランカ、あなたがやれる支援や行動はどういったものがあると思いますか。また、国として取り組んでほしい支援や政策は？

自由記述

©大分合同新聞社　教育目的以外の無断転載・複製および頒布は禁止します。